

宝珠をめぐる古典芸能の世界

文筆家

井上 由理子

『海人』に関わる歴史的な登場人物

『海人』は彩りのある能である。史実や伝説、宗教や情愛などの様々な色合いの糸が紡がれて、物語の中にとこか懐かしいハーモニーを奏でている。

この懐かしさは、はるか古代の香りからかもし出されているのかもしれない。『海人』の描かれている時代は、飛鳥時代から奈良時代初期にかけて。何らかの形で藤原氏三代が関わる物語だ。登場する人物は「房前の大匠」(子方)を軸として構成されている。房前とは藤原房前をさして、房前の祖父は藤原氏の始祖である藤原鎌足。大化の改新以降に中大兄皇子(天智天皇)の腹心として活躍し、天智天皇より最高冠位の大職冠を賜った人物である。鎌足は直接『海人』には名前が上らないのだが「大職冠物」という言葉が、後々の芸能史の常套語として扱われるようになっていく。

鎌足の子供、つまり房前の父親が藤原不比等である。不比等は『海人』において「淡海公」の諡号で語られる。軽皇子(文武天皇)の擁立に功績があり、天皇に娘の宮子を嫁がせ、首皇子(聖武天皇)の外祖父となる。さらに娘の光明子(光明皇后)を聖武天皇に嫁がせるなど、天皇家との姻戚関係を深めることで、政治の実権を手中に収めていった。また『海人』に関連する不比等の足跡のひとつとしては、藤原氏の氏寺である山階寺を平城京に移し、名前を興福寺と改めたことが上げられよう。

不比等には四人の息子がおり、次男の房前が藤原北家を築く

など、それぞれが藤原四家の家祖となり、父の不比等とともに藤原氏の繁栄の基盤を固めていった。中でも房前の政治的な手腕と出世は抜きん出て、後の世に藤原北家が摂関家として公家の最高家格となるのは周知のとおり。

「玉取り伝説」の典拠となるもの

『海人』にいだく懐かしさは、この曲が幼いころから御伽噺のように聞かされてきた「玉取り伝説」を思い出させるからであろうか。私の知るところの「玉取り伝説」には、ふたつのストーリーがあった。どうやらそれは『日本書紀』と『志度寺縁起』から発生したもののらしい。簡単にあらすじを記したい。まずは『日本書紀』の流れから。

——天皇(允恭天皇)が淡路島で狩りをしていたところ、たくさんの獣たちが山谷に満ちているにもかかわらず、一日かかって一匹も収獲できなかつた。占いによると、島の神の祟りであるという。「明石の海底にある真珠を供物にせよ」との神託にしたがい、方々の海人を集めて海に潜らせた。ところがあまりにも海が深すぎて海底に届くことさえできなかつた。そこで阿波国の長邑の海人(男狭磯)が腰に縄をつけて海に潜った。やがて海人は大きなアワビを抱えて海原に浮上した。海に浸かっていた縄の長さから察しても、海の深さがしのばれ、すでに海人は息絶えていた。アワビの腹を切り裂くと、そこには桃の実ほどの大きな真珠があった。

この真珠を神に捧げることで、多くの獸を獲ることができた——一方の『志度寺縁起』の志度寺とは、香川県さぬき市志度にある寺で、藤原不比等は堂塔を建てるなどして、寺の発展に尽力している。『志度寺縁起』として知られる一連の絵解きなどの源は、鎌倉時代末期には成立していたといわれている。能『海人』の典拠ともされ、縁起の内容は謡曲の構想によく似ている。『志度寺縁起』の玉取りに関する内容をあらずじにまとめると『海人』の概要と重なるので、ここでは省かせていただこう。

あくまで私情ではあるが『海人』を観能するさいに感じる一種の懐かしさは、ワキ座の床机に座した子方の房前の目線と心模様様が、『志度寺縁起』による「玉取り伝説」を聞いた子供ころの感受性に触れることでわき上る。宝珠を奪い返すため、海に深く潜って龍宮に至り、悪龍をはじめ恐ろしい魚などに肢体をものがれ、宝珠を隠すために自ら乳の下を切り裂くという、母(前シテ)が耐えた痛さ苦しさを思う時、子としての母への思慕に胸が締めつけられる。同時に、観能をしている現在の私自身はすでに母親となっていて、わが子の立志のために「捨てん命露程も惜しからじ」の詞章に共鳴する。宝珠を取り返すくだりの屈指の見せどころ「玉之段」には、苦悩のうちに愛する者を想う決死さがにじみ出て、「玉之段」の鋭敏で果敢な型の連続に、母の気高い誇りすら感じられる。

『海人』における発端は、不比等の子として華々しく育ちながら「この身残りて母知らず」と母恋しさに出立した追善の旅である。「賤しき海人の子」と知ってなお、母の名残の地に赴く子の発心。貴賤の身分を生きながら、隔たりを越えうる精神のもとに展開する『海人』もまた、能に共通する人間の本質の基に描かれた世界である。

『海人』に見る龍女成仏、女人成仏

『海人』の舞台は「玉之段」を見せた後、海人が母の亡霊であることを明かす。宝珠は無事に取り戻され、子は藤原氏の後継者となり、母と子は再会を果たしているのだから、物語としては一応のまとまりをなしている。しかし『海人』ではこまでを前場とし、母が筆跡を残して弔いを乞うという脚色をつなぎとして、後場につなげる。

『海人』の物語を紡ぐ糸の彩りは、前場と後場の作者の違いを匂わせる。『海人』の原作は金春系の古能といわれ、後年、後場を中心として世阿弥によって改訂され、さらに現行の演出形態に整えられたと推測されている。

後場の出場で、橋掛かりに登場した母の霊(後シテ)の姿に『海人』の初見者は驚くかもしれない。面は目が金色の泥眼、黒垂の頭には龍の冠り物をいただき、鱗文様の摺箔という出立。まさに龍態の姿なのである。「冥路を昏々として」いた母の霊は、龍女に化身していたのだった。ここに龍女が登場するのは、前場の龍宮と響きあう設定であること以上に、『海人』がつけられた中世の宗教観に立脚している。現代では社会的に克服されている宿業の通念ではあるが、当時の女人は成仏できない者とされていた。そんな世にも女性が成仏できる数少ない手立として『法華経』の「提婆達多品」の功德があった。「提婆達多品」には龍女が現れるくだりがある。

——龍宮での教化を終えた文殊菩薩が「娑羯羅龍王の八歳になる娘の龍女は知恵に優れて、すみやかに悟りを開いた」と明かす。智積菩薩や舍利弗は「五障のある女人の身。信じられない」と疑う。すると龍女が現われて、釈尊に宝珠を捧げ、たちまちに男子に変身して即身成仏した様を表わした——

房前の母は、もちろん女人である。しかも殺生の罪を負う（『海人』では海松藻を刈る）海人という生業の者であった。さらに龍という人にあらざる生きものの姿となっている。『海人』は、仏法による龍女成仏、ひいては女人成仏のありがたさを諷う。「龍神威恭敬」と経巻を懐に讀んで（小書・懐中之舞・南方の無垢世界の浄土に転生する龍女の姿が、典雅で颯爽とした早舞となって舞台の上に立ち上がる）。

『海人』は女人成仏を主題として完結するようと思われるが、謡曲の詞章は「龍女成佛さてこそ讚州志度寺と号し 毎年八講朝暮の勤行 佛法の繁昌の霊地となるも この孝養とうけたまはる」で締めくくられている。志度寺の霊験記の「とく要素も、親孝行の讃歌も『海人』の曲趣を表わした彩りの綾である。

近世に引き継がれた「大職冠物」

能が武家を中心に愛好された中世から近世にかけて、同時代に流行していた芸能に幸若舞がある。幸若舞とは曲舞の流れを汲む芸能で、綿密な語りをともなう。演目の中には「志度寺縁起」などを典拠とする『大職冠（大織冠）』と題された作品を持つ。『大職冠』のあらすじを記そう。

——大職冠（藤原鎌足と不比等を合わす）の長女は聖武天皇の后となり、次女のコウハク女は類まれな美貌によって、唐の皇帝の妻として望まれる。コウハク女が唐に渡航するに際しては、船や従人などをとつもなく豪華に調べて、大職冠は日本の威光を示し面目を果たした。后となったコウハク女は、興福寺の釈迦仏建立の願を立て、釈迦仏の眉間にはめる宝珠を日本に送ることにする。万戸將軍・運宗の率いる軍兵三百人が宝珠を守護して出航する。海底に潜む龍王らは宝珠を略奪しようと、運宗軍と激戦を繰り返す。

返すが敗戦する。そこで龍王の乙姫コヒサイ姫を運宗に近づけて、姫の色香で宝珠を盗ませることに成功する。宝珠が奪われた地・房前に出向いた大職冠は、宝珠を探索しながら、土地の海人との間に一子をもうけた。海人はわが子を藤原氏の棟梁とすることを大職冠に頼み、宝珠を取り返すために龍宮に忍び込む。龍に食いちぎられ、自害して果てた海人の胸からは宝珠が見つかった。宝珠は無事に興福寺の本尊の眉間に籠められた——

一大軍記物の様相をおびてスベクタクルに展開する『大職冠』に加えて、幸若舞には『大職冠』と同様の素材からつくられた「海人」と「入鹿」がある。近世に至っては、三作を下敷きにした「大職冠物」と呼ばれるジャンルに引き継がれ、近松門左衛門の浄瑠璃『大職冠』をはじめ多くの作品が生み出されていく。能や幸若舞に限らず、近世の演劇や舞踊にも抵抗なく取り入れられた「志度寺縁起」や「玉取り伝説」は、日本人が当たり前のように認識し、虚実を交えて演出を試みなくなる格好のテーマであったのだろう。

最後に能「海人」の宝珠「面向不背の珠」の行方を追おう。そもそもこの宝珠の名前は、玉の中におわす釈迦如来の像がいくずの方向から拝しても、背を向けることなく正面を向いていることから名づけられたという。この珍しい宝珠は、折から造像中であった興福寺中金堂の本尊である釈迦如来の眉間につけられ、その後、仏頭の中に納められたといわれる。しかし康平三年（一〇六〇）の大火によって、中金堂は炎上し本尊ともども宝珠も焼失したとされていた。ところが昭和五十一年、琵琶湖に浮かぶ竹生島の宝厳寺で、この宝珠が発見されたというのだ。海人が命をかけて海底より取り出した「面向不背の珠」は、千三百年の時を経て、今なおドラマチックな縁の糸を紡いでいるらしい。